

スポーツ施設の活用状況と活用促進課題 －公共温水プール施設について－

石井 康宏 石川 旦

キーワード：スポーツ施設、活用状況、促進課題、温水プール

Availability and problems of utilizing sports facilities: A case of public heated indoor pools

Yasuhiro Ishii Noboru Ishikawa

Abstract

This study was intended to examine the availability of sports facilities and to find the problems of utilizing those facilities, especially public heated indoor pools in Miyagi prefecture. Method used was a questionnaire: one was administered to persons who were managing, in which were asked about 1) its location, 2) their ways of management, 3) statistics, 4) their estimation of user's purposes and satisfaction, and also one was administered to user in which were asked 1) personal attributes, 2) frequency, 3) purpose and satisfaction, and 4) their demands. Pools covered were 28, numbers of questionnaires collected were 26 from the managers and 432 from their users, who were 18 years and older, 171 males and 261 females. This survey was undertaken between September and October in 1999. The results were summarized as follows:

1. Most pools were opened from 10:00 to 20:00. More than 90% of pools were totally or partially operated by affiliated bodies, and programs were served but no intentions for new services. More users in summer period than winter period: the difference in the average was about 4000 persons per month.
2. One of the main purposes for the providers was to facilitate further participation in lifelong sport. They believed that they had been realizing those claimed purposes, but they had tasks to increase users, to save budget spending, and to adjust available hours.
3. Fifty to sixty percent of the users expressed their satisfactions in using those pools. Although many of them had some demands for program services and/or availability of facility, they were thinking that those demands were not able to be realized.

Key words : spots facility, public pools, availability, tasks and problems

1. はじめに

私たちは、現在、様々な社会状況の変化に直面している。自由時間の増大、高齢化の進展などの社会環境の変化は、人々の生活様式にも急激な変化をもたらしている。また、機械化や自動化による生活の利便化と競争の激化等の現代の生活環境の変化は、身体活動の機会を減少させ、精神的ストレスを増大させるなど、人々の心身に大きな影響を与えていている。このように社会や国民の意識の変化をふまえ、健康に関する学習やスポーツの実践は、ますます重要になってきている。

この中、保健体育審議会（以後保体審）答申『生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について』²⁾では、スポーツの振興に関しては、十分な財源を確保し、国として基本的な計画を進めようとしているところである。

特にスポーツ施設は、スポーツ活動の上で基礎的な条件となるものであり、その整備は生涯スポーツ社会の実現において不可欠なものである。スポーツ施設数の増加を図っていくことと、既存のスポーツ施設の有効活用をさらに一層促進していくことが必要となるってきている。

今後、これらのスポーツ施設をどのように活用していくかが問題であり、公共スポーツ施設の整備・運営と学校体育施設等の有効利用が今後の課題となってきた。特に、この25年間で公共スポーツ施設は6倍の伸びを示しており、社会の情勢またはスポーツへのニーズから公共スポーツ施設に対する様々なサービス（機能）への期待が寄せられているところである。

さて、『体力・スポーツに関する世論調査』³⁾では、今後行いたい運動・スポーツ種目について、「軽い水泳」は高い位置を占めており、そして最近急速に、水中運動、アクアティックス、アクアビクス、水中ウォーキングなどのいろいろな水泳以外の水中での運動が一般の人々に広がり始めている。温水プールでも水中ウォーキングをしている人は珍しくなくなってきた。

このように、水泳が生涯スポーツに有効な種目であるとともに、活用したいでは国民のスポーツ実施に大きな影響を持つものと考えられるものである。ここでは、一年中継続して利用できる温水プールの活用状況を設置者側と利用者側の両面から調査し、その促進課題や今後の活用の方向性を探ることを目的とする。特に公共温水プールについて調査する。

II. 研究方法

1. 公共温水プール施設の設置者についての調査

1) 調査対象

宮城県内の公共温水プール施設 28 施設。

2) 調査時期 平成 11 年 9 月～10 月

3) 調査方法と回収結果

質問紙による郵送法

(回収総数 26 施設で回収率は 92.9%)

4) 調査内容

①プール活用状況 7 項目の単純集計

②利用者の差異による活用状況 7 項目のクロス集計

2. 公共温水プール施設の利用者についての調査

1) 調査対象者

宮城県公共温水プール 6 施設を利用している 18 歳以上の男女

2) 調査時期

平成 11 年 9 月下旬～10 月上旬

3) 調査方法

調査対象施設受付付近に調査用紙を置き、その施設利用者に記入してもらった。回収数は、432 名

4) 調査内容

①調査対象者の概況、調査対象者の利用動向 7 項目の単純集計

②調査対象者の利用頻度の差異による利用動向 6 項目のクロス集計

3. 公共温水プール施設の設置者と利用者の対応関係について

1) 方法と手順

①満足度と要望の対応を公共温水プール施設の設置者の調査結果と公共温水プール施設の調査対象者の調査結果について比較・検討

②面接法により、公共温水プール施設の利用者と監視員に、公共温水プール施設の問題点について意見を聞いた。

III. 結果と考察

1. 公共温水プール施設の設置者側

①公共温水プールの運営状況

宮城県の公共温水プールは、年々増えてきており、施設のほとんどが 25m 用メインプールを持ち、トレーニング施設等と一緒に造られる複合施設となっていた。プールの付帯施設としては、「更衣室・ロッカー」、「シャワールーム」、「管理室」、「採暖室」が 80% 以上の施設に設置されていた。

営業時間では、開館時刻は 10 時、閉館時刻は 20 時が

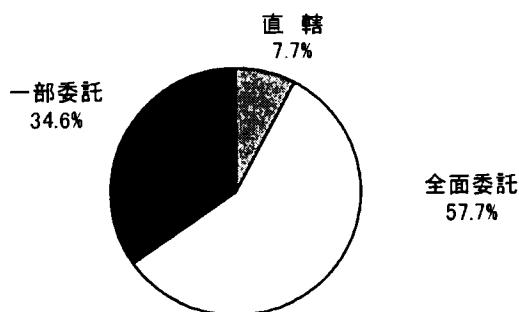
多かった。

公共温水プール施設の運営形態については、「全面委託」や「一部委託」が多く、その委託先については、公社（財團法人等）が多かった。

表1 運営形態と委託先

	運営形態	公社	民間企業	第3セクター	その他
直 輄	7.7%	—	—	—	—
全面委託	57.7%	46.2%	0.0%	7.7%	3.8%
一部委託	34.6%	3.8%	30.8%	0.0%	0.0%
合 計	100.0%	50.0%	30.8%	7.7%	3.8%

図1 公共温水プール施設の運営形態



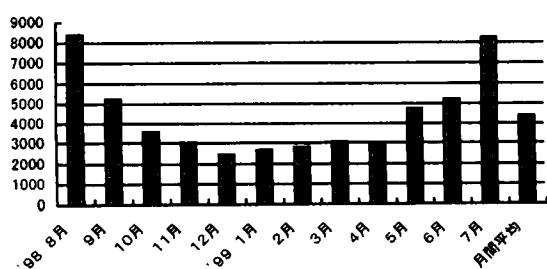
プログラムサービスでは、9割の施設で行っていたが、今後新しいプログラムサービスに取り組もうとは考えていなかつた。

施設の利用状況では、利用者数が時期によって大きく変動があった。夏期期間と冬期期間では月平均で約4000人の差があった。

表2 夏期期間と冬期期間の公共温水プール施設利用者の差

期 間	1ヶ月平均
夏期期間（6月～9月）	6787.1 (人)
冬期期間（12月～3月）	2751.8 (人)
差	4035.3 (人)

図2 月間利用者数

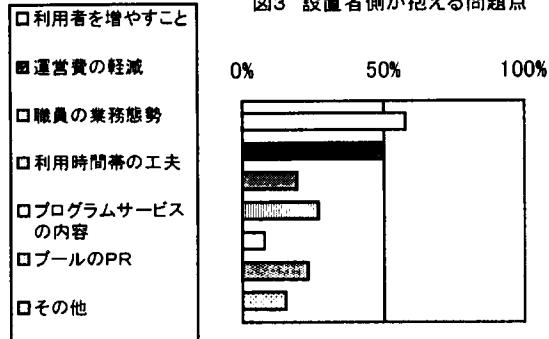


設置者側が持つ現在の問題点については、①「利用者を増やすこと」、②「運営費の軽減」、③「利用時間帯の工夫」に今後取り組んでいかなければならない課題としていた。

公共温水プール施設の委託は、利用者の増加や運営費の軽減の量的・財政的な問題を解決するために進められてきたが、委託が進んでも問題は改善されておらず、顕在化している。

中西⁸⁾は、委託化が簡単に経営課題の解決にはつながらないと指摘している。

図3 設置者側が抱える問題点



②公共温水プールの設置者側から見た評価

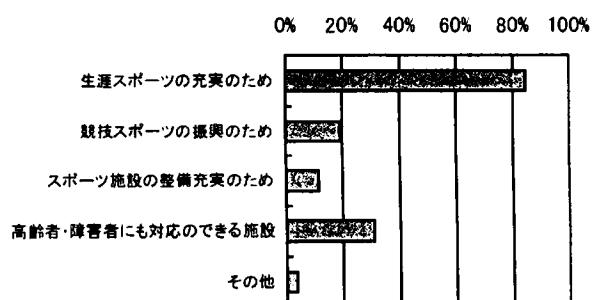
各温水プールの設置目的は、「健康づくりのため」、「生涯スポーツの充実のため」であり、各温水プールの目的達成度の自己評価については、ほとんどの施設で果たしていると見ていた。

設置者側では、公共温水プール施設としての目的が十分に果たされていると考えているようである。

また、設置者側から見た利用者の満足度でも、利用者が満足して利用していると見ていた。

このことから設置者側は、目的を達成し、利用者も満足していると見ていた。しかし、現状の課題は利用者を増やすことであり、そのためには、プールのPRや利用時間の延長など検討しなければならないことがあるとみていた。

図4 公共温水プールの設置目的



八代¹²⁾は、直接、間接経営関わらず、利用者の利益を最大にしようという経営の姿勢こそが大切であると指摘しており、現在利用している利用者だけでなく施設を利用していない住民にも目を向けて目的を果たすことが大切となってきた。

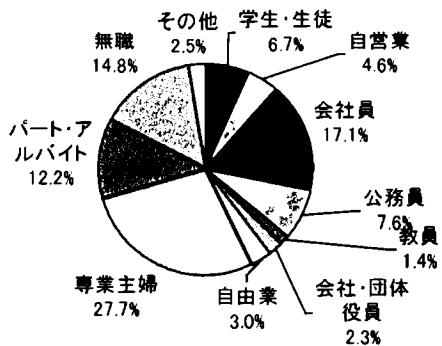
2. 公共温水プール施設の利用者側

①調査対象者の特性

調査対象者は、18歳以上の男性171名、女性261名であった。

職業については、専業主婦、会社員、パート・アルバイトの順に多かった。

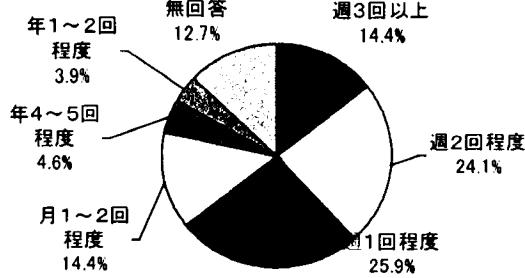
図5 利用者の職業



②調査対象者の利用動向

調査対象者の利用頻度については、調査対象者全体では「週1回程度」が最も多く、「週2回程度」、「週3回以上」、「月1~2回程度」の順であった。また、性別でみると「週3回以上」、「月1~2回程度」で男性の割合が高く、「週2回程度」、「週1回程度」で女性の割合が高かった。

図6 利用者の利用頻度



利用目的では、「健康のため」、「運動不足解消」、「ダイエットのため」、「体力向上」、「泳ぐことが好きだから」、「ストレス解消」の順に多かった（複数回答）。

年齢からみると、50~70代では「健康のため」が高く、

10~30代では「ダイエットのため」が高かった。40代、50代では「ストレス解消」が高かった。

またこれらの結果は、最近の健康志向や運動不足を反映したかたちを示した。¹³⁾

利用理由では、「近いから」が最も高く、次に「自由に泳げるから」であり、「利用料金が安い」、「雰囲気が良いから」、「衛生的だから」、「駐車場があるから」、「職員が親切だから」の順であった（複数回答）。

公共温水プールの利用時の利用形態では、「1人」で利用、「2~3人」の順で利用割合が高かった。

男性では「1人」で利用が多く、女性では「2~3人」で利用が高かった。

利用頻度や利用形態では性別による違いが見られ、利用目的では、年齢による違いが見られた。利用理由については、身近な施設を利用する傾向が見られた。

図7 利用者の利用目的

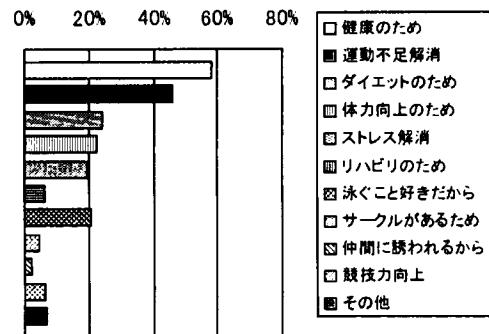
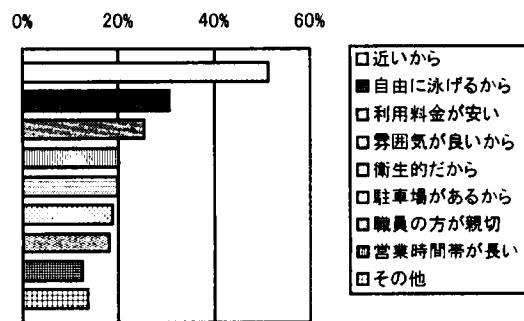


図8 利用者の利用理由



② 公共温水プールの利用者側の評価

調査対象者の満足度は、「指導・サービス面」で5割の満足度であったが、「施設・設備面」、「管理・運営面」では6割を超える満足度であり、設置者が見ているのと同じように満足度が高かった。

次に公共温水プール施設への要望では、「健康・体力づくりなどの各種相談機能」、「指導者の配置」、「多彩なスポーツプログラムの提供」、「利用時間帯の延長」、「設備

器具の充実」の要望が高かった。これらの結果は、『我が国のスポーツに関する調査』¹⁴⁾と同様の結果だった。

性別からみると、男性では、「利用時間帯の延長」に要望が高く、女性では、「健康・体力づくりなどの各種相談機能」に要望が高かった。

年齢からみると、10代・20代では、「設備器具の充実」、「利用時間帯の延長」で要望があり、40代では、「多彩なスポーツプログラムの提供」、「健康・体力づくりなどの各種相談機能」の要望が高かった。

しかし、公共施設ということで不十分であっても仕方のないと思うこと（あきらめ度）については、利用者の施設に対する満足度の高さから「特になし」が高かったが、「利用時間帯」、「指導者の配置数」、「健康・体力づくりなどの各種相談機能」、「設備器具」の順に改善はされないだろうとあきらめていた。

図9 公共温水プールへの要望

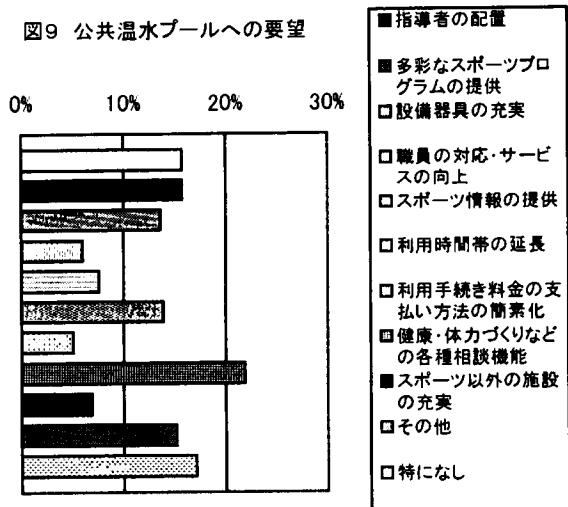
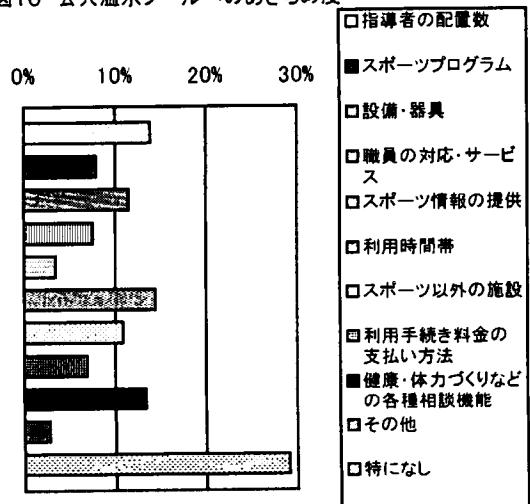


図10 公共温水プールへのあきらめ度



要望とあきらめ度は、大変似た傾向を示し、利用者の要望が実現することは難しいと見ていることが分かった。

次に公共温水プール施設の今後必要なことでは、「高齢者にも対応できる施設・設備」が、次に「アクアビクス（水中での各種の運動）」「くつろげる場所」「レストラン」「障害者にも対応できる施設・設備」「家族で楽しめる施設・設備」「レジャーブール」の順であった。

年齢からみると、10代・20代では「障害者にも対応できる施設・設備」「レジャーブール」「レストラン」に、30代では「家族で楽しめる施設・設備」「アクアビクス（水中での各種の運動）」「子供に対する指導」「レジャーブール」に、40代では「家族で楽しめる施設・設備」「レストラン」に、50代では「仲間づくりの場所」に、60代・70代では「高齢者にも対応できる施設・設備」について割合が高かった。各年代毎に必要ことが違っていることが分かり、その内容も年代に応じ変化していた。

施設利用者の約6割が満足しているが、しかしその施設への要望を持っているが、その改善については難しいと考えていた。

3. 公共温水プール施設の設置者と調査対象者の対応関係

設置者側から見た利用者の満足度と調査対象者の満足度を単純に比較はできないが、満足が多いという点で、同じ傾向があるとみてもよい。

設置者側が利用者を満足とみて、実際の利用者も満足と思っているのであれば問題はないであろうか。

中ら¹⁵⁾は、「公共スポーツ施設に満足感を持っているながらも、さらに要望も持っている」ことを指摘している。本調査でも、利用者（調査対象者）も指導者やプログラムサービスについて要望を持っていることが明らかにされた。

ここでは、日常の施設利用者の要望や監視員対応に苦慮していることについて直接聞いてみた。

①コースロープ1本

大抵のプールは、完泳コースと水中運動等ができるフリーエリアをコースロープで区切っている。そのプールは完泳コースが他のプールより多く、完泳できる利用者が多かったそうである。コースが多いのでの泳力の差によって泳ぐコースが決まっていたそうである。ある時監視の担当者が変わったら、コースロープが1本減らされていたそうである。理由は、完泳コースが混んでいないからである。フリーエリアが混んでいる分けでもないそうです。この利用者がコースロープを1本増やしてほしいと話したら、前述の理由を言われ十分に話を聞いてくれなかつたそうです。

②メガネ問題

ある利用者がメガネをかけてプールサイドまで来たそうです。そのプールでは、メガネは割れると危険という理由で、更衣室においてくることが決まりになっていました。そこで監視員が利用者にメガネをおいてくるように話をしましたが、利用者は面倒なのでなかなかいふことを聞いてくれません。監視員はその利用者がメガネを置いてくるまで近くにいてお願ひするそうです。しかし、メガネを使わないと見えない人にとっては更衣室からプールまで不安ですし、危険が伴います。民間のプールでは、プールサイドにメガネ置きを設置したりして対応しています。問題は、利用者の気持ちより管理が先になり、改善がなかなか進まないということではないでしょうか。

4. 公共温水プール活用促進要因

①設置者側からの活用促進要因と課題

各公共温水プール施設の利用者数より月平均の利用者数の多い順に上位施設を6、中位施設を14、下位施設を6の3つのレベル分け、その相違の結果から活用促進要因と課題を検討するために考察を試みた。

閉館時刻では、上位施設「21:00」と多く、中位施設、下位施設では「20:00」が多くかった。

次に、プログラムサービス数では、上位施設では、他段階の施設よりプログラムサービス数が多かった。

これらを検討してみると、上位施設は閉館時間が遅かったり、プログラムサービス数が多いと言うことが分かった。

また、利用者数が夏期期間と冬期期間でかなりの差があったが、冬期期間に利用者が減る原因を把握しておくことが必要となろう。利用者にまたは住民に、冬期期間にも利用してもらうよう宣伝し普及させることが大切である。

宮下¹⁸⁾は、「一年中同じ条件で運動のできる温水プールは運動を生活の中に取り込むことや運動を継続するには最適と思われる。特に高齢者や障害者にとっては、一年中行えるすばらしいスポーツの場所となる。」指摘している。

②利用者側からの活用促進要因と課題

ここでは調査対象者の利用頻度別に、「週2回以上」と「週1回程度」と「月2回以下」の3段階に分け、頻度別により各項目違いを検討した。

利用頻度の高い段階では、健康のためだけでなくその他にも目的を持ち、個人で自由に泳ぐという傾向があり、目的は健康のためや運動不足解消のためであり、土曜か休日に近くの施設を2~3人で利用するという傾向がみられた。

公共温水プール施設への要望では、利用頻度の高い段

階では、指導者に対する要望が高く、利用頻度の低い段階では、プログラムサービスへの要望が高かった。

IV. まとめ

年々公共温水プール施設は増加し、住民に対して利用されやすくなっている。しかし、その利用方法は、利用者任せであり、設置者側からのプログラムサービスは少なく、潜在的な利用者の顕在化までには至っていない。弾力的な運営方法として委託を行っているが、その方法も万能ではなく問題を抱えている。直接運営、間接運営に関わらず、公共のスポーツ施設の使命は、利用者の利益を最大にすることである。利用者の利用動向に気を配り、その実現を目指すことは公共温水プール施設の課題である。

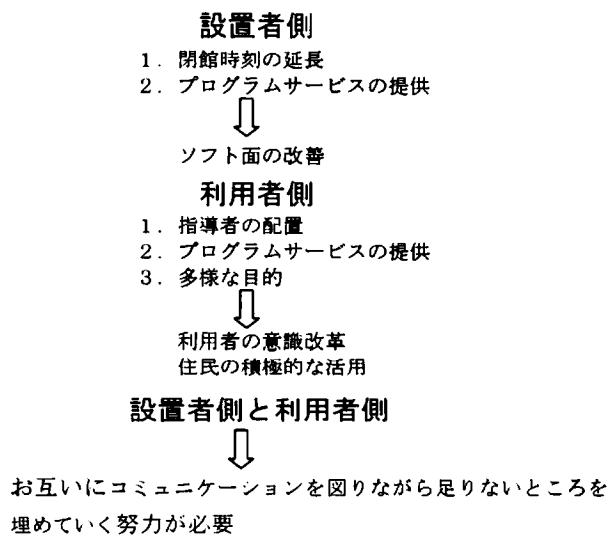
利用者に関しては、運動不足を解消し、健康な生活を送るためだけでなく、スポーツ本来の楽しみの目的を持ち、継続的に活動することが大切であり、そのことを理解させ実現させていくことが大切である。そのためには、一年中一定の運動環境である温水プールは最適である。

また、利用者は、「多少足りないところがあつても近くの公共温水プール施設を利用する」という傾向がみられ、その足りないところは、公共施設とすることで改善できないとあきらめているところがみられた。これからは、公共スポーツ施設は自分たちが共有する施設という認識を持ち、自ら改善に努めていこうとする姿勢が大切である。

このような考え方から、設置者と利用者で直接的な関係を設けて、その施設特有の活用方法を見つけだしていくことが活用の促進となろう。

以下に結論の内容の模式図を掲載する。

図11 公共温水プール施設の活用促進要因



V. 今後の課題

公共スポーツ施設の役割はこれから生涯スポーツを進めて言うためには大変重要となっている。施設の活用の仕方や住民へのサービスのあり方、住民へのスポーツの啓蒙等の課題も多い。

①公共温水プール施設のマーケティング②利用者の意識改革③住民との話し合い④スポーツN P Oの導入⑤生涯スポーツの場としての公共温水プール施設などについて検討していくことは重要となってこよう。

参考・引用文献

- 1) 総理府：『体力・スポーツに関する調査』1997. 10
- 2) 保健体育審議会答申：『生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について』1997. 9
- 3) 文部省：『我が国の文教施策：心と体の健康とスポーツ』1998 43-45 ページ
- 4) 文部省：『体育・スポーツ施設現況調査報告』1995
- 5) 電通総研スポーツ文化研究チーム+加藤久著：『スポーツ生活構想』厚有出版
- 6) 小見山秀生：「3大環境見本市と欧州健康スポーツ施設視察」に同行して 『体育施設』22-25 1998. 2月
- 7) 山口泰雄編：『健康・スポーツの社会学』建帛社 1996
- 8) 中西純司：「生涯スポーツの振興戦略と公共スポーツ施設のマーケティング」－地域スポーツ振興拠点施設のインフラクティブ・マーケティングの実現を目指す

指してー 厨義弘監修 「生涯スポーツの社会学」

学術図書出版 1997 57-78

- 9) 総理府：『体力・スポーツに関する世論調査』1997
- 10) 宮下充正：『運動するから健康である』東京大学出版会 116-118 1995
- 11) 保健体育審議会：21世紀に向けたスポーツの振興方策について答申、「スポーツ施設の整備の指針」1989. 11
- 12) 八代勉：公共スポーツ施設の運営 筑波大学
- 13) 総理府：体力スポーツに関する世論調査 1997 運動スポーツを行う理由 20歳以上
- 14) 三和総合研究所：『我が国のスポーツに関する調査』文部省委託調査研究 1992
- 15) 中比呂志ら：「公共スポーツ施設に対する利用者の満足及び要望に関する研究」 体育スポーツ経営学研究 第10巻第1号 1993. 10
- 16) 金田成市：「25m屋内温水プールづくり」での3つのポイント 月刊体育施設 1999. 2
- 17) 八代勉ら：「公共スポーツ施設の経営と課題」 体育の科学 VOL. 41. 5月号 1991 362-365
- 18) 宮下充正：「ヤマハスポーツ文化フォーラム 1999」講演 仙台 1999. 11月
- 19) 間野義之：「スポーツN P O・スポーツP F Iを活用したスポーツクラブの作り方（その1）」 財団法人日本体育協会 指導者のためのスポーツジャーナル 1998. 12月号 12-15